

う。隣の市営火葬場は金のない人や行き倒れを無料で焼くため、こちらには電気とのこと。ガンガーに來られない人はどうするかインドの知人に聞くと、近くの大きな川に流すという。輪廻転生を信じるヒンドゥー教は次に何に生まれ変わるかが問題なので、死体を葬る墓はない。川の上にも物売りはいる。面白かったのはポリバケツに入れたハセのような魚を、「買ってガンガーに放せ」と言う男たち。ここでは放生(ほうじょう)も簡略化されている。そうこうしているうちに舟は中州に着いた。たくさんの人たちが沐浴をしている。小屋のようなものは脱衣場なのだろう。こちらはホテルから腰に帯くバスタオルを持参の上、既に水泳パンツを履いている。昨日市内のスポーツ店で買ったものだ。水着はあまり売れないのか、倉庫の奥の方から探し出してきてくれた。目をつぶって、ざぶんと頭まで。水温は二十五度くらいか。念のためもう一度頭まで浸かって中州に上がった。別にどこがどう変わったわけでもないが、アラハバードで会ったヒンドゥーの聖者に、「おまえはインド人だ」と言われ、沐浴したからかなと思った。

**\* 宗教を生きたる人々**

第三回世界ヒンドゥー大会の開会式が開かれる十一日は、乾期には珍しく朝から豪雨。ベナレスから四時間ほどで現地に着くと、河川敷の会場が水浸して使えなくなつたという。全国から集まった人たちが駅にあふれ、市内の学校に避難させているらしい。

結局、開会式は延期になり、一行はアショーク・シンガルVHP(世界ヒンドゥー協会)総裁の邸宅を訪問。そこに集まっていた白人ほどの各国の代表の前で、神道の宮司が大会成功の折願祭を行った。その後、同総裁が、神道の神々の多くはイン

ドから渡つたものだと説明すると、代表たちは興味深そうに聞いていた。

十二日には天候が回復、十一日に予定されていた式典が同日午後、メイン会場で行われた。参加者は会場に六万人、テントに十五万人。壇上には、シンガル総裁をはじめVHPの母体であるRSS(民族奉仕団)のスターリヤン総裁、ジョーシ元BIP(インド人民党)総裁をはじめ宗教界、政界、財界の有力者が顔をそろえる。

日本からの一行は壇上からあいさつし、奈良から来た僧が、東大寺の大仏の開眼供養で導師を勤めたインドのパラモン僧止・普賢徳那(ぼだいせんを)が唱えた「華厳声明」を朗々と響かせた。続いて、宮司がメッセージ。冒頭「ジャイ・スリラーム(おお神よ)」。とヒンダイ語で叫ぶと、会衆は大喜びで「ジャイ・スリラーム」と叫んだ。

大会で目立ったのは、「ヒンドゥー国家の建設を」「インド政治のヒンドゥー精神化を」など極めて政治的なメッセージだ。イスラム教との対立を先鋭化させる「ラーム寺院建設」のスローガンも目立つ。一九九二年、アヨーディヤーにあったモスクを過激なヒンドゥー教徒が破壊した。ムガル帝国時代、ヒンドゥー寺院だったのを壊してモスクを建てたのだから元に戻せ、と叫んでもつとも、その史実は不確かだ。ちなみに日本からの一行がもらった記念品は、ラーム寺院の完成図をエッチングしたステンレス板だった。

IT(情報技術)産業を中心に経済発展が続く、インドにも消費文化が押し寄せてきている中、伝統的なヒンドゥー精神が失われていることに危機感を募らせる人は多い。高まるヒンドゥー・ナショナリズムはインドという国のアイデンティティーを求めている。

シンガル総裁は「西洋では人間は体と心と魂だと考えていて、この三つは人によって別々であるため、互いに競争し争うようになった」ところが、インドでは、三つのほかに魂(アートルマ)があると考える。魂は人と人をつなげ、それに基づいてヒンドゥー教も仏教も生まれた。魂は互いのためを考え、幸福や平和に大きな役割を果たす。宗教を大事にするのが時代のニーズで、これに応えるには、同じ考えを持つている国々が一緒になって動かないといけない」と語っていた。

日本からインドを見ると、大らかで親的なインドの人たちには悪いのだが、インドで生まれた仏教は日本に安住の地を見いだしたのではないかと思える。中国でも朝鮮でも仏教は迫害され、そのおかげで多くの高僧が日本に渡ってきた。ところが近世以後、仏教は世俗化してしまう。

しかし、インドでは人々が宗教を生きていた。宗教なしに生きられない過酷な社会だからかもしれないが……。それに比べて日本の宗教は儀礼や教養になつてしまつている。源流を訪ねると、考えさせられること



20万人以上が集まった第3回世界ヒンドゥー大会